

平成 22 年度「学力向上のための P D C A サイクルづくり支援事業」

C 調査分析結果について

教 学 指 導 課

1 調査教科及び調査した児童生徒数

() 内は参加校数

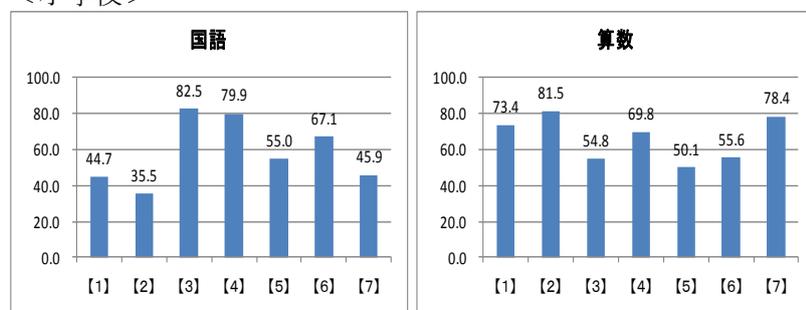
	国語	算数・数学	英語
小学校 5 年	14, 545 人 (284 校)	14, 541 人 (284 校)	
中学校 2 年	11, 367 人 (118 校)	11, 525 人 (119 校)	11, 393 人 (118 校)

2 各問の正答率

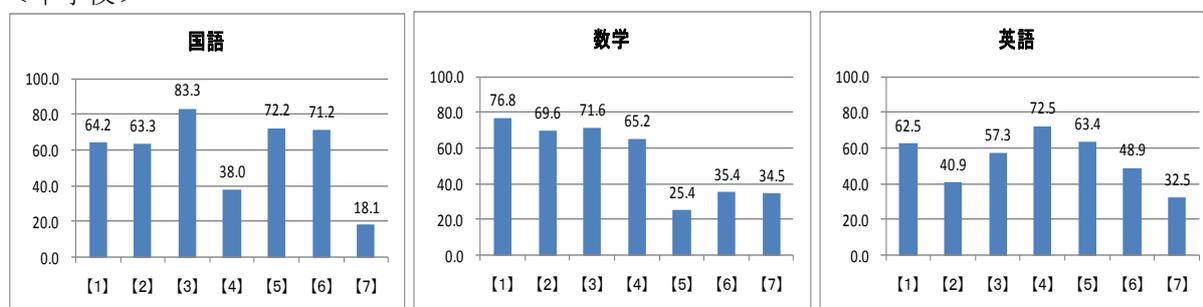
(単位%)

問題番号		【1】	【2】	【3】	【4】	【5】	【6】	【7】	全体
小学校 5 年	国語	44.7	35.5	82.5	79.9	55.0	67.1	45.9	58.6
	算数	73.4	81.5	54.8	69.8	50.1	55.6	78.4	66.2
中学校 2 年	国語	64.2	63.3	83.3	38.0	72.2	71.2	18.1	58.6
	数学	76.8	69.6	71.6	65.2	25.4	35.4	34.5	54.1
	英語	62.5	40.9	57.3	72.5	63.4	48.9	32.5	54.0

< 小学校 >



< 中学校 >



◇成果と◆課題

(1) 国語

<小学校 5 学年>

◇対義語や類義語の理解【3】，接続語の理解【4】については，相当数の児童ができています。

◆学年別漢字配当表の第 4 学年までに配当されている漢字を正しく書いたり【1】，5 学年までに配当されている漢字を正しく読んだり【2】することに課題がある。

◇◆目的に応じて中心となる語をとらえて文章を正しく読むことは P 調査と比較して向上した (P 調査【4】(38.7%)→C 調査【5】(55.0%))。正答率は，依然課題がある。

◇◆複数の情報を対応させたり組み合わせたりして，自分の考えにまとめることは，P 調査と比較して向上した (P 調査【5】(15.1%)→C 調査【7】(45.9%))。正答率は，依然課題がある。

<中学校 2 学年>

◇語句の意味を理解し，文脈の中で適切に使うこと【3】，叙述と叙述を関連づけながら読み，中心となる叙述について，作者の考えをつかむこと【5】，文の展開に即して，論理的に内容をつなげること【6】については，相当数の生徒ができています。

▲歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直して読むことに，P 調査から継続して課題がある。(P 調査【4】(50.7%)→C【4】(38.0%))

(2) 算数・数学

<小学校 5 学年>

◇小学校算数では，(小数)+(整数)を計算することが向上し (P 調査【1】(56.9%)→C 調査【1】(73.4%))，相当数の児童ができています。

◇(整数)×(小数)を計算すること【2】や，式から問題解決における思考過程を読み取ること【7】について，相当数の児童ができています。

◆帯分数，仮分数，整数の大小関係についての理解【3】や，わり算の筆算の各段階の意味についての理解【5】，変化の規則性を読み取ること【6】に課題がある。

<中学校 2 学年>

◇正の数と負の数の四則計算【1】や，式を基に比例の関係をグラフに表すこと【3】について，相当数の生徒ができています。

◆円錐の体積を求めることに，P 調査から継続して課題がある。(P 調査【4】(30.5%)→C 調査【5】(25.4%))

◆文字式の意味を，具体的な事象の中で読み取ること【6】や，具体的な事象について，文字式を用いて説明すること【7】に課題がある。

(3) 英語

<中学校 2 学年>

◇曜日の名称を英語で正しく書く【4】ことについて，相当数の生徒ができています。

◇◆疑問詞を使った簡単な質問を理解し，適切に答えることが P 調査と比較して向上した (P 調査【4】(29.3%)→C 調査【6】(48.9%))。正答率は，依然課題がある。

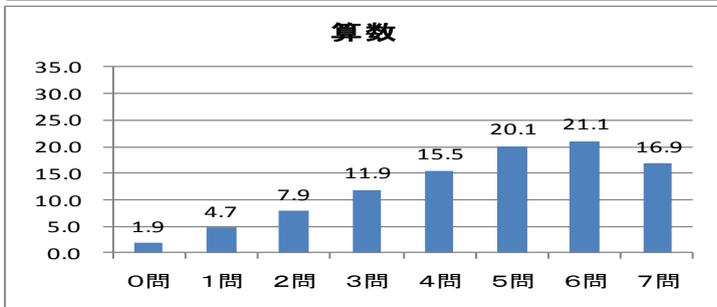
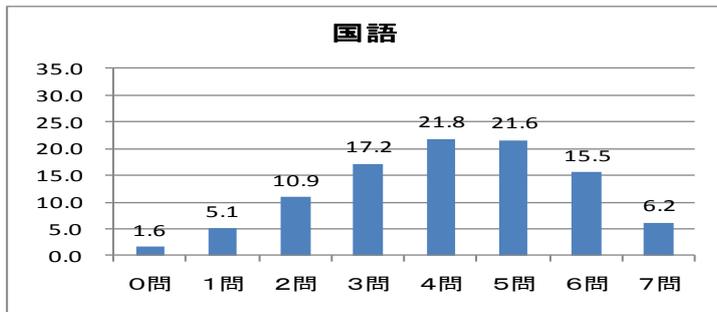
◆友だちのことについて，2 文で紹介文を書くこと【7】に課題がある。

3 正答数の分布

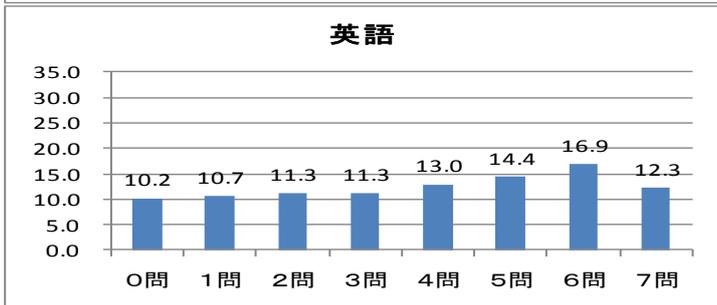
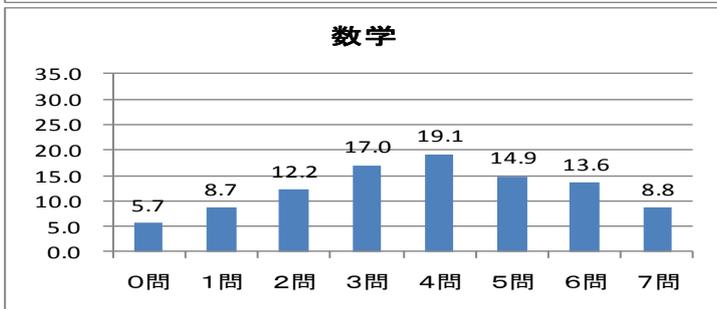
(単位%)

正解数		0問	1問正解	2問正解	3問正解	4問正解	5問正解	6問正解	全問正解
小学校 5年	国語	1.6	5.1	10.9	17.2	21.8	21.6	15.5	6.2
	算数	1.9	4.7	7.9	11.9	15.5	20.1	21.1	16.9
中学校 2年	国語	2.1	5.7	10.9	15.6	20.5	22.7	16.9	5.6
	数学	5.7	8.7	12.2	17.0	19.1	14.9	13.6	8.8
	英語	10.2	10.7	11.3	11.3	13.0	14.4	16.9	12.3

<小学校>

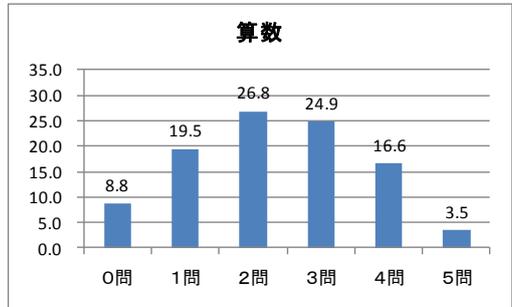
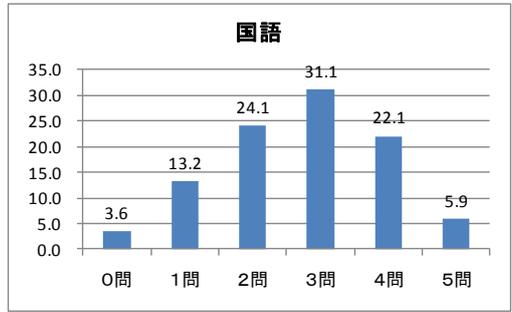


<中学校>

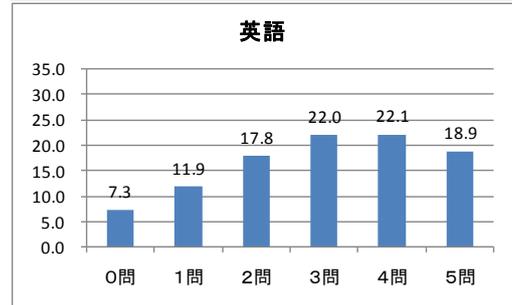
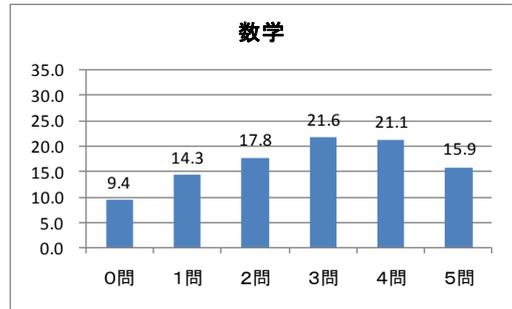
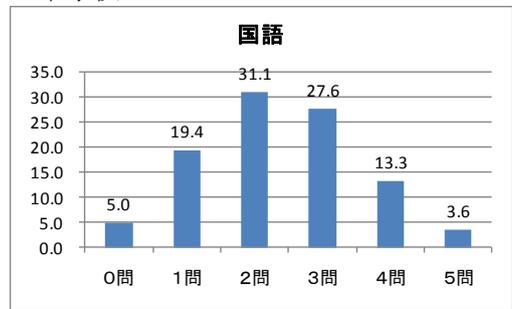


(参考：P調査における分布)

<小学校>



<中学校>



- (1) P調査結果と比べると、小学校国語、算数、中学校国語の分布が、左右対称の山なりから右寄りの分布となった。中学校数学の分布は、右寄りから左右対称の分布となった。中学校英語では、右寄りの分布から、どの階級にも一定の割合がある分布となった。
- (2) 正答数が0問の児童・生徒の割合が、P調査結果と比べると小学校国語では3.6%→1.6%、小学校算数では8.8%→1.9%、中学校国語では5.0%→2.1%、中学校数学では9.4%→5.7%と減った。学習から離れがちな児童・生徒を引き寄せる指導の取組の成果が出てきていると考えられる。英語では、7.3%→10.2%と増えた。
- (3) 各教科とも、学習指導を進めるに当たっては、生徒一人一人の特性を十分理解し、それぞれの生徒に応じた指導方法を工夫していくことが必要である。特に、定着状況が不十分な児童・生徒に対しては、繰り返し学習をしたり、場面を変えて学習したりするなどの補充的な学習が必要になる。また、基礎・基本を身に付けている児童・生徒に対しては、それを基にしてより広げたり深めたり、進めたりするなどの発展的な学習に取り組めるようにする指導の工夫が求められる。
- (4) 第2回学力向上担当ミーティングでは、C調査結果をもとに、各教科を窓口とした自校の指導改善の取組の成果の検証をし、ACTIONプランとしてすぐに取り組めること、次年度の重点とすることについての情報交換を行う。それらも参考にしながら、各校の実態の即した取組を今後もしていきたい。

◆各教科の正答率及び正答数に対する分析◆

(過去の正答率や指導の具体については、解説・指導シートを参照)

【国語】〈小学校5年〉

1 各問の正答率について

(1) 全体の傾向

全体の正答率は、P調査問題と比較して4.1ポイント上回った。最も正答率が高かったのは【3】82.5%で、【1】、【2】、【5】、【7】の正答率が低い。【7】については、P調査よりも上回ってはいるが、引き続き課題である。

(2) 学習指導にあたって

- 【1】、【2】は、日常生活で使用頻度が低かったり、使用範囲が狭かったりすることが予想される漢字を出題した。指導改善の方向として、次の2点に留意したい。
 - ・教室の言語環境に気を配り、日常生活での使用度は低いが、授業の中でよく使われる言葉を意識して使用するようにすること。(例えば、学習カードの項目欄に「段落」と印字してしまうのではなく、空欄にしてその都度書かせるなど)
 - ・練習帳の空欄に繰り返し書かせる宿題だけでなく、「意味を書かせる」「熟語の集めさせる」「短文を作らせる」など、漢字をひとまとまりの言葉として触れるような宿題の出し方の工夫もしたい。
- 【3】の正答率は、82.5%である。この問は、P調査にはなかった新設の問題である。類義語や対義語等の指導が適切に行われている成果と言える。今後も大切にしていきたい。
- 【4】の正答率は、79.9%である。P調査類題88.1%を8.2ポイント下回っている。接続語の働きを理解して、文と文のつながりを考えながら文章を読んでいく学習を積み重ねていきたい。
- 【5】の正答率は、55.0%である。P調査類題38.7%を16.3ポイント上回っている。叙述同士を関係付けて読み取る学習を進めている成果が表れてきている。さらに、目的に応じて中心となる語をとらえて正しく読み取る指導を大切にしていきたい。
- 【6】の正答率は、67.1%である。主張しようとする事について必要な情報を読み取る学習を積み重ねていきたい。
- 【7】の正答率は、45.9%である。P調査類題15.1%を30.8ポイント上回っている。P調査類題より難易度が低かったことも考えられるが、叙述を根拠に理由付けてまとめるという指導に改善が認められる。しかし、正答率からみたととき、半数の子どもたちが正答できない現状がある。引き続き、目的に合わせて、必要な情報を読み取ったり、読み取った複数の情報を対応させ様式や書式を選択して書いたりする指導を充実させていく必要がある。

2 正答数の分布について

(1) 全体の傾向

4問正解が最も高く、山がやや右側に寄った分布になっている。正答数0問が1.6%、全問正答が6.2%であった。P調査の正答数0問は3.6%、全問正答は5.9%であり、指導の改善が認められる。

(2) 学習指導に当たって

- 日常の授業を進めるに当たっては、つける力を明確にして言語活動を決め出すようにすることが求められる。その際に、子どもの興味関心を把握した上で、必要感があり追究の見通しがもてる学習課題を設定していくようにする。
- 指導シートを参考に補充・補完指導を行っていくように考える。漢字に関する指導においては、実際に文の中で使われているものを、機会をとらえて指導していくようにする。また、日々の漢字練習の仕方やテストのやり方なども、子どもが意欲をもてるものとなるように工夫する。
- 書くことの指導では、様々な構成の仕方や表現の仕方についての理解を深め、相手や目的や意図に応じて構成を工夫する場面を設定していく。また、様々な様式や書式に即して書く活動の充実を図っていく。文章と資料などを関連付けながら、事実と意見を区別して書く学習を重視していく。
- 読むことの指導では、目的や意図に応じて表現の効果などに注意しながら読む学習を展開していく。読んだことを生かし、表現や書き方のよさを自分の文章に取り入れていく等の学習を展開していく。
- 国語科の家庭学習のあり方も、児童が意欲を持って取り組めるように工夫して指導したい。

【国語】 <中学校 2年>

1 各問の正答率について

(1) 全体の傾向

全体の正答率は 58.6%で、P 調査問題と比較して 11.5 ポイント上回った。最も正答率が高かったのは【3】 83.3%で、【4】、【7】の正答率が低い。特に【7】については、P 調査同様、大きな課題がある。

(2) 学習指導に当たって

- 【1】、【2】は、日常生活で比較的使用頻度が高い漢字を出題した。日常生活の中で使用頻度の高い漢字の定着率は高いと考えられる。引き続き、日常生活で使用頻度が低いものや、授業の中で定着させなければならないような漢字について、指導を工夫していきたい。
- 【3】の正答率は、83.3%である。P 調査類題 86.8%よりも 3.5 ポイント下回っている。辞書を活用したり、漢字の字義を確認したりするなど、同音異義語や類義語、対義語を文脈の中で理解していく指導を大切にしたい。
- 【4】の正答率は 38.0%である。P 調査類題 50.7%よりも 12.7 ポイント下回っている。古典特有の仮名遣いの特徴や語のまとまりの理解が十分でないこと、あるいは「山」を漢字で書いた生徒も予想される。誤答を分析して確認し、その傾向により授業改善の方向を絞る必要がある。音読を通して、歴史的仮名遣いに親しませる指導が重要だと考えられる。
- 【5】の正答率は 72.2%である。この問は、P 調査問題にはなかった新設の問題である。中心となる語句の意味を他の語と関係付けながら、文脈に沿って読み取っていく学習を積み重ねていきたい。
- 【6】の正答率は 71.2%である。この問は、P 調査問題にはなかった新設の問題である。文と文、段落と段落相互の関係をとらえながら、文章全体の意味を読み取る学習を積み重ねていきたい。
- 【7】の正答率は 18.1%である。P 調査類題 25.6%よりも 7.5 ポイント下回っている。P 調査類題より難易度が高かったことが考えられるが、叙述を根拠に主張の理由付けをする学習を、各領域の学習活動で取り組んでいきたい。

2 正答数の分布について

(1) 全体の傾向

5 問正答が最も高く、山がやや右側に寄った分布になっている。正答数 0 問が 2.1%、全問正答が 5.6%であった。P 調査の正答数 0 問は 5.0%、全問正答は 3.6%であり、指導の改善が認められる。

(2) 学習指導に当たって

- 日常の授業を進めるに当たっては、つける力を明確にして言語活動を決め出すようにすることが求められる。その際に、子どもの興味関心を把握した上で、必要感があり追究の見通しがもてる学習課題を設定していくようにする。
- 指導シートを参考に補充・補完指導を行っていくように考える。漢字に関する指導においては、定着しにくい原因を押さえ、生徒が文脈に沿って適切かどうか考えながら漢字を使っていく学習場面を設定していくことが大切になる。また、使用頻度の低い漢字を意図的に取り上げたり、誤りやすい漢字を重点的に扱ったりするなどの指導を工夫することが必要になる。
- 読むことの指導では、内容の読み取りや、構成・展開の理解の上に立ち、筆者の表現意図について考え、評価していくことができる学習を考えていくようにする。また、目的をもった言語活動の中で、観点を明確にして複数の考えを比較検討、交流するような学習を展開する。文章と図表とを関連付けて考えながら読み取っていく学習の充実を図っていく。
- 書くことの指導では、自分の考えや主張と、根拠や事実と関わりを意識して書く活動の充実を図っていく。
- 国語科の家庭学習のあり方について、例えば「2 週間後に『い (さんずい)』のテストをやるから、『い』についてのレポートを書きましょう。」とか、「漢字の熟語を調べ、文章標記をする」など、生徒が目的や意欲をもち、繰り返し練習だけのものにならないように工夫して指導したい。

【算数・数学】<小学校5年>

1 各問の正答率について

(1) 全体の傾向

・P調査の類題である【1】、【3】、【5】、【7】については、P調査の正答率よりも上回る、あるいは高い正答率となった。また、5学年の学習内容である新規問題【2】、【4】、【6】についても、平成21年度C調査の正答率とほぼ同じか、それを上回る正答率となり成果が見られた。しかしながら、【3】、【5】、【6】については、正答率が50%台にとどまっているという課題も残った。

(2) 学習指導に当たって

- ・【1】はP調査類題の正答率を16.5ポイント上回り、73.4%になった。これは、類題の構造が同じであることから、数直線上で小数の位置や大きさを確かめたり、単位を付けることで日常生活に結び付けて考えたり、整数の計算に帰着させたりしながら、数の仕組みや意味を理解し、計算の仕方を考える指導が丁寧に行われてきた成果と考える。今後も意味理解を伴う指導を積み重ねたい。
- ・【2】はC調査で新たに加えた問題で、昨年度C調査類題の正答率を11.8ポイント上回り、81.5%になったものの、まだおよそ2割の児童ができていない。引き続き、乗法の交換法則や分配法則を、筆算の過程の中で用いていることを理解できるようにしたり、筆算の形式に隠れている計算処理のしくみを再確認したり、根拠を説明したりする場面づくりを大切にする必要がある。
- ・【3】はP調査類題の正答率を10.3ポイント上回り、54.8%になった。これは、分数の意味や表し方の理解を基に、分数の形から大小関係を予想して説明できるように指導してきた成果であると考えられる。今後も、仮分数、帯分数を相互に変形したり、整数や小数とともに同じ数直線上に表したりして、単位分数の幾つ分になるのかに着目して、整数部分に着目していくつといくつの間になるか考えたりするなど、分数の大きさに対する感覚を育てていきたい。
- ・【4】はC調査で新たに加えた問題で、昨年度C調査類題の正答率を0.2ポイント上回り、69.8%になった。これは、三角形の内角の和のきまりや二等辺三角形の角の大きさの関係を図と対応させて説明できるように指導してきた成果であると考えられる。図形の性質を見だし、それを用いて図形を調べたり構成したりする算数的活動を積極的に取り入れる指導を一層大切にしたい。
- ・【5】はP調査類題の正答率を37.9ポイント上回り、50.1%になったものの、昨年度C調査類題の正答率を4.3ポイント下回っており、また、まだ5割の児童が理解できていないという課題が残った。筆算の指導場面では、筆算の手続きの意味や示された数の意味を具体的な場面と結び付けて考える活動を取り入れながら指導することを再度確認したい。
- ・【6】はC調査で新たに加えた問題で、昨年度C調査類題の正答率を1.5ポイント上回り、55.6%になった。伴って変わる二つの数量を調べるときに、表からきまりを見付けるような学習がなされていると考えられるが、実際の形や様子の変化と結び付け、表を横に見て変化の規則性を見つけたり、表を縦に見て対応の規則性を見つけたりできるような指導を一層充実させたい。
- ・【7】はP調査類題の正答率を35.4ポイント上回り、78.4%になった。P調査で課題の見られた「図と式を結び付けて説明する」ことに対する指導改善が図られてきていると考えられる。今後も、式と図を結び付け、式に対応するまとまりを図の中に見いだしたり、表現された図から式を導いたりする双方向の学習を位置付けたい。

2 正答数の分布について

(1) 全体の傾向

・正答数の分布は7問中4～6問正答を平均とする、正規分布より右（高い方）に寄った分布となった。正答数0問の児童の割合がP調査より6.9ポイント下回り1.9%、全問正答した児童の割合はP調査より13.4ポイント上回り16.9%となり、基礎学力の定着が図られていると考えられる。

(2) 学習指導に当たって

- ・算数の学習指導を進めるに当たっては、一人一人の子どもに応じたきめ細やかな指導を行うことが大切である。特に、定着状況が不十分な子に対しては、繰り返し学習をしたり、場面を変えて学習したりするなどの補充的な学習が必要になる。また、基礎・基本を身に付けている子に対しては、それを基にしてより広げたり深めたりする発展的な学習に取り組める指導の工夫が求められる。
- ・補充的な学習では、繰り返し学習による補充だけでなく、同じ場面を別の方法で調べたり確かめたりして学び直すものや、作業的・体験的な算数的活動を繰り返し行うことで意味理解を深めたり考える力を高めたりする学習を必要に応じて取り入れることも大切である。例えば、「わり算の筆算」の学習で、わり算の筆算の手続きの意味を具体的な場面と結び付けて考えさせたり、わり算の筆算をするときに気を付けたり工夫したりすることを言葉でまとめさせたりすることも考えられる。
- ・発展的な学習では、子どもが自ら取り組んでみたいと思えるような、知的なおもしろさを感じられる指導の工夫も必要である。例えば、「変わり方」の学習で、対応する関係を式に表すことが困難な場合について、2つの数量の関係を表に表して調べ、きまりを見付けることによって問題を解決し、学ぶことのおもしろさや楽しさを味わわせるようなことが考えられる。

【算数・数学】＜中学校2年＞

1 各問の正答率について

(1) 全体の傾向

- ・P調査や昨年度のC調査の類題である【1】【2】【3】については、正答率が上回っており、【4】【5】【6】は正答率が下回った。新規の問題である【7】は、全国学力・学習状況調査における類題の正答率を上回った。

(2) 学習指導に当たって

- ・【1】はP調査類題の正答率を3.1ポイント上回り、76.8%となった。加減乗除を含む計算の指導で、誤りのある計算例を取り上げて、計算の過程を振り返り計算方法を確認するなど、計算の順序を理解し、確実に計算できるような指導が丁寧に行われてきたことの成果と考えられる。
- ・【2】は昨年のC調査類題での正答率を25.1ポイント上回り、69.6%となった。連立方程式の指導では、途中の式を丁寧に書かせてその過程を振り返り、一元一次方程式に変形するときに加減法と代入法のどちらで処理しようとしたのか確かめたり、その処理が適切かどうか検討したり、計算結果を二元一次方程式に代入して解の妥当性を確認したりする指導も大切にしたい。
- ・【3】は、P調査類題の正答率を17ポイント上回り、71.6%となった。これは、一次関数の単元においても、変化と対応の見方をもとに、表、式、グラフを関連付けた指導が丁寧に行われている成果と考えられる。引き続き、既習の関数と対比し、表、式、グラフを関連付けて特徴をまとめるような学び直しの機会を設けていく必要がある。
- ・【4】はP調査類題の正答率を7.3ポイント下回り、65.2%となった。昨年度のC調査類題の正答率よりは10ポイントほど改善しているが、依然として線対称と点対称の概念についての理解や判別が十分でないことが伺える。図をかいたり紙を折ったりする操作をもとに、線対称や線対称な図形の特徴について言葉で説明するような数学的活動を通して、図形を論理的に考察し表現することができる指導を今後も一層大切にしていきたい。
- ・【5】は、P調査類題の正答率を5.1ポイント下回って25.4%であった。誤答の中には、 π の付け忘れや、円柱の面積に $1/3$ をかけていない、底面の円周と高さをかけているなどが考えられる。また、立体図形の構成の仕方や体積などの公式についての意味理解が不十分な生徒がいると考えられる。立体を作ってその構成や体積の求め方を説明したり、式の意味を実感的にとらえたりするなど、体積の求め方について学び直す指導を、今まで以上に行う必要がある。
- ・【6】は、P調査類題の正答率を11.6ポイント下回り、35.4%となった。式の意味を、図と対応させ、文字の式をよむ学習をさらに丁寧に行いたい。また、文字を用いることへの抵抗を少なくする指導を工夫したい。文字を具体的な数に置き換えて事象をとらえている生徒の学びの姿を意識的に評価して、具体(数字)と抽象(文字)の行き来を繰り返すことで文字のもつ意味、特に変数の意味を理解できるような指導を重視したい。
- ・【7】は、正答率が34.5%であった。本年度の全国学力・学習状況調査の類題の正答率24%程度と比べると10ポイントほど上回っており、文字の式を用いた説明についての学習が行われている成果が現れてきている。誤答の中には、式変形をただで、結論とその根拠に関する記述のないものがあると考えられる。生徒の説明を基にしてよりの確な説明へと改善する活動をさらに充実させる必要がある。

2 正答数の分布について

(1) 全体の傾向

- ・3～4問正答を平均とする山なりの分布になっている。正答数0問の生徒の割合は5.7%でP調査を3.7ポイント下回った。また、全問正解の生徒の割合は、P調査を7.1ポイント下回り、8.8%であった。

(2) 学習指導に当たって

- ・数学の学習指導を進めるに当たっては、生徒一人一人の学習状況をとらえ、それぞれの生徒に応じた指導方法を工夫していくことが必要である。特に、定着状況が不十分な生徒に対しては、繰り返し学習をしたり、場面を変えて学習したりするなどの補充的な学習が必要になる。また、基礎・基本を身に付けている生徒に対しては、それを基にしてより広げたり深めたり進めたりするなどの発展的な学習に取り組めるようにする指導の一層の工夫が必要になる。
- ・習熟のための学習では、誤答を検討する場面を意図的に仕組み、計算処理の誤りを見付けたり修正したりする言語活動を取り入れ、既習の知識や理解を振り返ってとらえ直し、理解が曖昧であったところを自覚しながら補充できるようにしたい。
- ・発展的な学習では、条件の一部を変更した問題でも、問題を解決した過程を見直し、結果を予測して検証するなどの学習が行えるよう配慮したい。

【英語】 < 中学校 2 年 >

1 各問の正答率について

(1) 全体の傾向

- ・【1】語形変化の問題は、昨年度C調査と比べて正答率が低くなっている。【2】3人称のs, 【3】並べかえ問題は、P調査と比べ正答率が低くなっている。【4】語彙の問題, 【7】条件英作文については、昨年度C調査と比べて正答率が高くなっている。【5】【6】本文の内容理解はP調査に比べ正答率が高くなっている。

(2) 学習指導にあたって

- ・【1】昨年度C調査と同じ問題である。正答率 62.5%は、昨年度 67.2%より 4.7 ポイント低い。時制を表す語句が、文頭ではなく文末に来ている点、前後の文が現在形である点が要因と考えられる。時制を表す語句に注目することや、語形変化の定着を目的とした活動を十分行いたい。
- ・【2】P調査【1】の類題である。正答率は 40.9%で、P調査 81.6%の半分の正答率だった。不定詞 (want to) や、[主語＋一般動詞] の関係を理解・定着させるために、picture drill や書く活動を継続して行いたい。
- ・【3】P調査【2】の類題である。正答率は 57.3%で、P調査の 64.7%より約 7 ポイント下回った。[主語＋(助動詞)＋動詞＋目的語] などの語順の指導を、日本語との違いに留意して指導したり、語数の多い複雑な文を繰り返し練習したりするようにしたい。
- ・【4】昨年度C調査の類題である。正答率 72.5%で、昨年度 43.3%を大きく上回った。昨年度の August に比べ、Sunday の方が書く回数が多いことも原因と思われる。24 年度から指導する語が 300 語程度増えることも踏まえ、季節や月、曜日等の基本的な語を小テストやドリル、家庭学習等で繰り返し指導するようにしたい。
- ・【5】P調査【3】の類題である。正答率 63.4%で、P調査の 51.0%を上回った。《Yes-No 疑問文》についての指導が丁寧に行われている成果であるが、Yes, it is. などと主語を間違えている生徒が依然多いことが予想されるので、引き続き教科書本文の内容について《Yes-No 疑問文》を扱う中で、主語を正確に見付け、代名詞で答える指導を行いたい。
- ・【6】P調査【4】の類題である。正答率は 48.9%と決して高くはないが、P調査の 29.3%を大きく上回った。《wh-疑問文》の答え方が定着してきていると考えられる。さらに《wh-疑問文》について、[主語＋動詞] の語順で正しく答えることを意識させながら、書くことで文法面での正しさを確認できるような指導を丁寧に行っていくたい。
- ・【7】P調査【5】の類題である。正答率は 32.5%であり、P調査の 69.8%を大きく下回る結果となった。これは、1 人称で自己紹介文を書くことと、3 人称で友だちの紹介文を書くことの違いが出たものと思われる。昨年度C調査 (3 人称で友だちの紹介文を書く問題) の 29.6% と比べると 3 ポイントほど上昇している。今後とも「3 人称を主語にしたまとまりのある文章を書く」活動を繰り返し行い、教師が見とどけて定着を図る指導を継続していきたい。

2 正答数の分布について

(1) 全体の傾向

- ・左側が厚い分布である。正答数が 0 問から 2 問までの生徒が 32.2%いるが、昨年度のC調査 43.1%に比べると改善傾向にある。正答数が 6 問、7 問の割合が、9.8%から 29.2%へ上昇している。

(2) 学習指導にあたって

- ・come の過去形→came, 主語が 3 人称単数現在のときの want→wants, 日曜日→Sunday などの言語材料の理解や定着状況を、生徒個々で見とどけ、授業開始後の小テストや終末段階での定着問題等を通して継続して指導していきたい。
- ・Q - A活動や教科書本文についての英問英答では、1 語での返答で終わらせず、例のような文まで求めることで、正しい語順や言語材料を身に付けていきたい。

例) Does he want to play

baseball? Yes.→Yes, he does. He wants to play baseball.

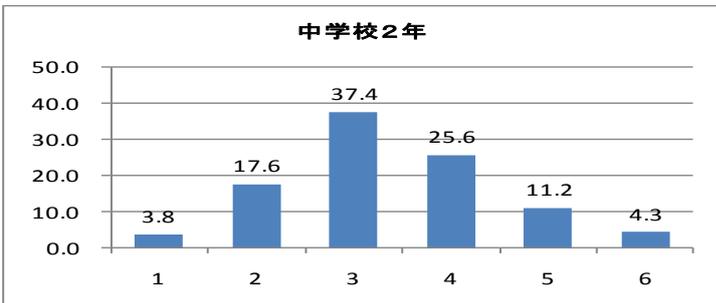
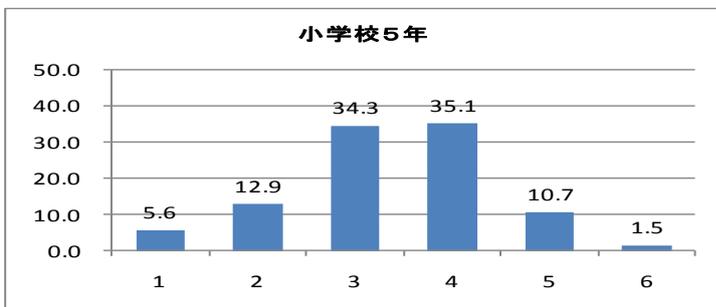
4 家庭学習の時間

◇学校の授業時間以外に、ふだん（月曜日から金曜日）、1日あたりどれくらいの時間、勉強しますか。（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間も含まれます。）

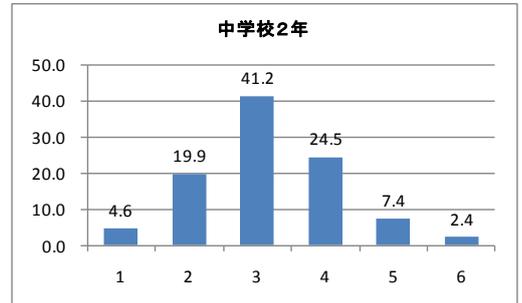
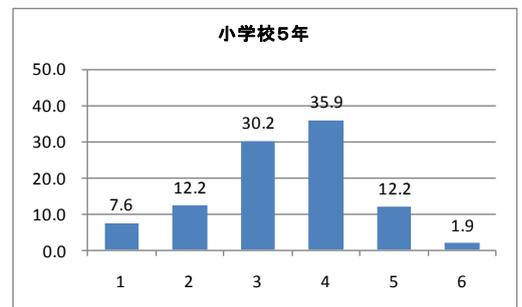
- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1 3時間以上 | 2 2時間以上, 3時間より少ない |
| 3 1時間以上, 2時間より少ない | 4 30分以上, 1時間より少ない |
| 5 30分より少ない | 6 まったくしない |

(単位%)

選択肢	3時間以上	2時間～3時間	1時間～2時間	30分～1時間	30未満	全くしない
小学校5年	5.6	12.9	34.3	35.1	10.7	1.5
中学校2年	3.8	17.6	37.4	25.6	11.2	4.3



(参考：P調査における分布)



- (1) 小学校5年では、P調査で課題であった家庭学習時間が1時間未満である児童割合が、P調査の50.0%が47.3%となり若干減った。個に応じた対応をさらに進めたい。
- (2) 中学校2年では、P調査結果よりも全体的に家庭学習時間がわずかに減っていることがグラフから読み取れる。部活動や文化祭の準備等で学校外での学習時間を十分に取れないことも予想されるが、30分未満の割合が9.8%→15.5%と5.7ポイント上昇していることから、これらの生徒を中心に、各学校の実態に即した改善策を考えたい。